

スケトウダラ資源管理方策開発に向けた取り組み

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 水産総合研究センター
	公開日: 2024-07-17
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2010032

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



スケトウダラ資源管理方策開発に向けた取り組み

中央水産研究所 経営経済研究センター
北海道区水産研究所 資源管理部

研究の背景・目的

1. スケトウダラは、我が国の海面漁業生産量の約 6% を占める重要な漁業資源です。しかし、資源変動が大きく、また様々な漁法で漁獲されているため、管理が難しい資源です。
2. スケトウダラは TAC（漁獲可能量）制度を軸にした資源管理が行われていますが、経済・社会要因を含めた総合的な資源管理方策の開発が求められています。
3. さらに、現在、日本海北部系群では資源状態が著しく悪化し、これまでの管理方策では速やかな資源の回復は難しい状況となっており、より効果的な資源管理方策が求められています。

研究成果

1. 日・韓・露・米の研究者の参画を得て、スケトウダラの資源面・漁業操業面・加工流通面の全体に関し、各国の最新動向を把握するとともに、日本の中長期的管理方策を立案するための情報整備を行いました(図 1)。その成果は、日本水産学会の「Fisheries Science」誌における初の特集企画として出版しました。

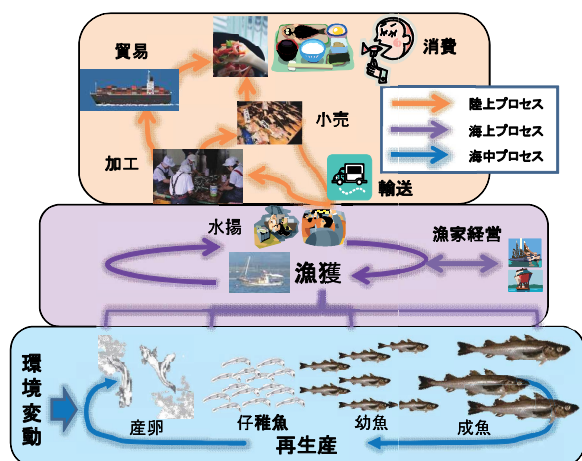


図 1. スケトウダラ資源の生産から消費まで

2. また、状態が悪化した資源の管理効果について、シミュレーションモデルを用いて試行を行ったところ、禁漁を想定した場合に親魚量（SSB）が維持されることが示され（図 2）、また、禁漁によって漁獲データが無くても調査船調査による資源量指標値にて資源管理は可能という結果が得られました。さらに、禁漁解除直後の漁獲許容量（ABC）を適切な水準に設定

することで、長期的な総漁獲量の増加が期待できることが示されました（図 3）。

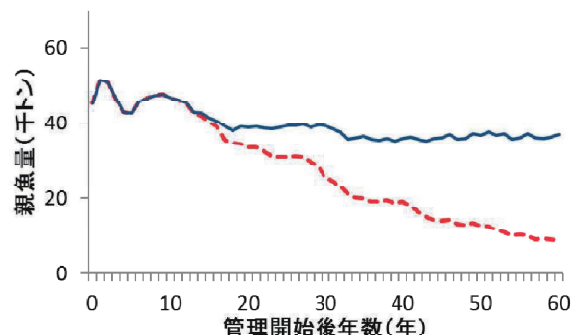


図 2. 管理による親魚量の平均値の推移

禁漁終了後 5 年間の ABC は SSB の 10%
実線；SSB が 3 万トン未満で禁漁開始、
破線；禁漁の設定なし

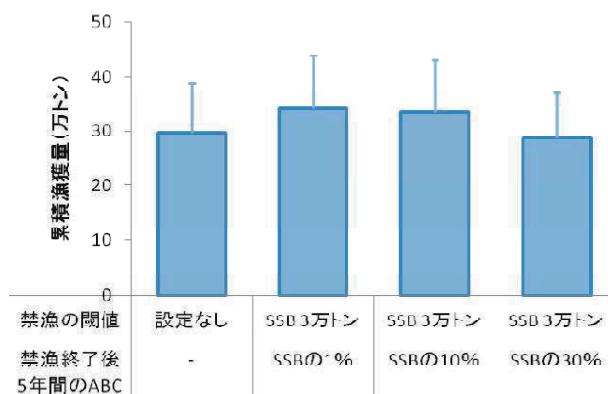


図 3. 各シナリオにおける 60 年間の累積漁獲量（平均値±S.D.）

波及効果

1. 沖合漁業では、スケトウダラのすり身・白身の海外市況と資源変動の不確実性を組み込んだシミュレーションにより管理施策を検討することで漁家経営の向上に繋がると考えられます。
2. モデルを用いて様々な管理方策の効果を検証し、スケトウダラ資源の変化に適切に対応した管理計画を想定することで、資源が適切に管理されることが期待されます。
3. 以上により、スケトウダラ資源を持続可能な形で利用し、水産業の振興にも資するための中長期的な戦略の整備が進むことが期待されます。